

精神文化の礎を築いた人々…

先人顕彰シリーズ①

鹿角市先人顕彰館 〒018-53秋田県鹿角市十和田毛馬内字柏崎3番地の2 電話0186-35-5250

当先人顕彰館は、鹿角にゆかりの深い先人に関する資料の発掘収集、保存、事蹟の調査研究と公開展示をいたしております。
世界的な東洋史学者「内藤湖南」、十和田湖の開発に尽力した「和井内貞行」の両氏をメインに常設展示し、さらに各界の先覚者を順次展示紹介してまいります。



せがわきよこ 瀬川清子 女性民俗学の大家 (1895~1984)

明治44年小学校教員となり母校毛馬内小学校に勤務した。大正11年、当時「女も大学には入れる」という新聞広告を読み、入学を決意、夫三郎、姑かつと共に上京し、東洋大学に入学した。卒業後私立川村学園、東京市立一中で教鞭を執った。
この頃から柳田国男に師事し民俗学の研究採集に没頭した。その後79才まで大妻女子大学の教授を勤めた。また84才の高齢まで日本全国はもちろんモンゴル、ネパール、太平洋諸島等々に調査の足跡を残す。民俗学の発展に尽くした功績は大きくエイボン社の女性教育賞、民俗学者最高の柳田国男賞を受賞。

略年譜

- 明治28年 鹿角郡毛馬内、岩船源太郎、スケの長女として生まれた。本名キヨ
- 43年 毛馬内小を卒業。翌3月准教員試験に合格。母校の准調導。大正4年同調導
- 大正6年 大湯村瀬川三郎と結婚。(三郎秋田師範を卒業、毛馬内小学校調導。)
- 11年 家族と共に上京。東洋大学専門部倫理学科に入学した。
- 14年 東洋大学を卒業。私立川村学院に奉職。昭和2年東京市立一中に招かれ国漢の教師として昭和18年まで奉職。市立一中勤務のかたわら柳田国男に師事した。
- 昭和18年 大妻女子大学非常勤講師。昭和22年民俗学研究所評議員。昭和35年大妻女子大教授。
- 55年 マリエイボン女性教育賞、翌年柳田国男賞受賞。昭和59年2月20日没。享年88才。

すぎやま まきぞう 地域医療に貢献 杉山万喜蔵 (1907~1957)

尾去沢小学校を卒業後叔父を頼って青森中学から北海道帝国大学医科に学ぶ。昭和15年青森県立病院に勤務、19年青森医専の医大昇格に尽力した。昭和28年腎臓のレントゲン撮影法を完成、診療治療の飛躍に貢献した。また、個人で行なった貸費生による無医村解消運動は全国的テストケースとして注目を集めた。さらに氏は昭和33年頃には秋田の国保医申込みにも全部応じられると自身満々であった。当時弘前大医学部には秋田県出身医が11名おり、この育ての親であった。全国的に有数の無医村をかかえた秋田のため、優れた医者の育成と配置に尽力した。



略年譜

- 明治40年 秋田県鹿角郡尾去沢町田郡、万次郎、ステの次男として生まれた。
- 昭和9年 北海道帝国大学医学部卒業。附属病院麻酔医皮膚泌尿器科学講座勤務。
- 14年 医学博士の学位授与さる。翌年青森県立病院皮膚泌尿器科長。
- 20年 青森医学専門学校教授兼昭和23年弘前大学医学部皮膚泌尿器科主任教授。
- 28年 腎臓の立体レントゲン撮影法完成。同時にこの撮影に基づく腎臓模型の製作法も発案。
- 31年 弘前大学附属病院長に就任。多年の宿願であった病院庁舎の新築に着手さる。
- 32年 秋田県鹿角郡柴平村に医者連れてきた1月27日急逝した。享年50才。

従四位、勲四等瑞宝章に叙せられる。



おだ しげまじん 小田島樹人 気品に富んだ作曲家 (1885~1959)

本名は次郎、樹人は俳号。大正3年東京音楽学校(現芸大)を卒業、同窓に中山晋平、梁田貞(秋高校歌作曲者)がいた。東京芝の三光小学校に音楽教師として奉職した。樹人は在学中から「子供のための音楽活動」を念願し、この時代に「おもちゃのマーチ」「山は夕焼け」「赤いツリ」などのすぐれた童謡、唱歌を作曲した。大正8年病氣退職、都新聞歌壇の選者などをして昭和11年郷里に帰り、花輪高女、秋田師範で教鞭をとるかたわら、「秋田学生音楽連盟」を結成し、地域の音楽振興に尽くす。学識豊かで句をよくし、生徒に親われた。

略年譜

- 明治18年 当時の鹿角郡長、小田島由義、ハツの次男として秋田県鹿角郡花輪町に生まれた。
- 41年 東京音楽学校の予科に入学、途中病氣のため転地療養。
- 大正3年 同校音楽科卒業。東京芝三光小学校に奉職。この頃中山晋平作曲「カチューシャ」大ヒットした。中山晋平等と新童謡運動を起した。「おもちゃのマーチ」等作曲。
- 8年 東京芝三光小学校病氣退職。翌年三菱金属に入社、研究所図書係勤務。
- 昭和2年 三菱を退社。都新聞(東京新聞)編集局に入り、歌壇の選者となった。
- 11年 秋田県立花輪高女、秋田師範嘱託教授等勤務。この頃、湯瀬小唄、鹿角小唄等作曲。
- 16年 県立秋田中学校定時制で教鞭をとり定年を迎えた。
- 25年 秋田学生音楽連盟を結成。機関誌「音楽秋田」を編集。昭和34年10月11日没。享年74才。

せき なお う えもん 鹿角の観光に 新時代を築いた (1873~1943) 五代目 関直右衛門

明治34年29才の時大志を抱いて北海道に渡り、造林業を営む。明治42年王子製紙の造材請負に加わり、山子の食料自給を画策、開農場を興す。入植者は主に郷里より招致、自費を投じて開墾に従事せしめ熟田五百町歩、畑地、山村等九百町歩を得、後これらを入植小作人に譲渡、自作農にしている。造材事業経営中も温泉を中心とする郷土の振興に尽力、国鉄花輪線開通を機に湯瀬ホテルを創設、十和田八幡平の名勝宣伝と玉川温泉や道路の開発を成し遂げ、公益事業への寄進などその功績は枚挙にいとまがない。また、推されて宮川村村長となり敏腕をふるった。

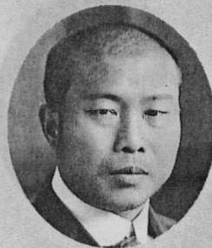


略年譜

- 明治6年 四代目関直右衛門、トラの次男として鹿角郡宮川村に生まれた。幼名鶴蔵。
- 34年 北海道釧路で陸軍々馬補充部土木工事請負をした。
- 42年 王子製紙会社と造材契約を初めて行ない事業を担当。以後三井物産造材も請負。
- 大正6年 北海道勇払郡鶴川村で木挽工場も経営。五代直右衛門襲名す。45才。
- 10年 樺太に進出造材事業行方。翌年富士製紙及関西方面に販売、昭和3年まで継続。
- 昭和6年 鶴川開農場自作農創設により小作人に開放した。国鉄花輪線(好摩-花輪間)開通。
- 7年 湯瀬ホテル建築開業。11年紺綬褒章受章。鹿角の観光を秋田よりラジオ放送行方。
- 12年 玉川温泉経営。直右衛門の尽力により民謡「湯瀬村コ」初めて全国放送される。
- 15年 宮川村村長に就任。18年9月27日村長現職の儘苦悶の生涯を閉じた。享年71才。

あべ とうすけ 阿部藤助 郷土の興隆に生涯をささく (1886~1928)

明治37年19才のとき父の急死にあい、大館中学校を中退し家業を継いだ。翌年安倍義徳村長のもと20才の若さで宮川村助役となった。当時、米の収量反当3俵弱の湿田を暗渠排水による乾田化と区画整理の必要を説得し、耕地整理組合を結成土地改良に成功した。大正2年東北地方は大凶作に見舞われ、困苦にあえぐ村民を指導し宮川購買販売組合を結成、肥料や日用品の供給安定を図った。組合は年々発展して全国有数の優良組合となった。八幡平公民館の北側に巨大な彰徳碑が建っている。これは、助役8年、村長15年、合わせて23年の長い間無報酬で村の振興に尽くした氏の功績を讃えたものである。



略年譜

- 明治19年 豪農阿部孫四郎、ハツの長男として鹿角郡宮川村長谷川字谷内に生まれた。
- 37年 大館中学校を中退、家業を継いだ。
- 38年 宮川村助役に就任。耕地の乾田化と区画整理に着手。
- 44年 耕地整理組合結成、55町歩余の土地改良に成功した。総工費1万7千余円。
- 大正3年 宮川信用購買販売組合結成。6部落に販売所設置。農業倉庫建設。宮川村村長に就任。
- 11年 鹿角郡農会長。隣村曙と、南鹿電機会社創立両村に初めて電灯がともされた。
- 14年 産業組合功労者として緑綬有功章、農事功労者として大日本農会総賞を受賞。
- 昭和3年 5月20日病没。享年43才。